

松永澄夫著「経験のエレメント—体の感覚と物象の知覚・質と空間規定—」東信堂 2015年10月31日刊を読む

## 「価値」「意味」「秩序」

### 1. 宿題

- (1) 私はこのところ、人間は物的環境世界を生きるだけではなく「意味世界を生きる」動物であるということに焦点を定めて、あれこれ書いてきている。言葉を巡るさまざまな著作、論稿の場合に「意味」について考えるのは当たり前だが、食べることを主題にするときも、環境問題を論ずるときも、社会の成り立ちや秩序の形成、変容を扱うときも、意味はいつでも焦点の一つであった。「価値・意味・秩序」の三つ組みでさまざまな事柄を理解してゆくというのは、私の基本態度となっている。
- (2) 「意味世界とは価値世界」であり、人は動物としてたとえば気象や食べ物などの物的価値事象と関わる一方で、更に意味の力と一体になった価値の感受によって自分の生活を方向づける。食べ物さえ、さまざまな意味(たとえばお祝いという意味、もてなしという意味)のもとで栄養物としての価値とは違った価値づけを纏ったものとして関わる相手となる。(一般に物的世界のすべてが人間ではさまざまな意味に覆われ、その意味に応じた価値づけのもとで相手にすべきものとなる。)
- (3) 意味と価値との世界を論じることには、人個人の日々の生活、人間関係の有りよう、社会の成り立ち、さまざまな文化、夢やフィクションの力など、どこまでも広がる多くの考察課題を追っかける楽しさがある。そうして、そのような考察においては、哲学は生き生きとした現実と向き合い、そこから糧を得て柔軟で強靱なものになるし、かつ、人の心を揺さぶる文学や、事柄の理解を促し事柄の評価の参考になる批評などのように、現実生活に入り込んでその養分となる仕方で実際のな力をもつことができると信じている。

### 2. 視線を見る

- (1) 視線を見るときは、人がどの方向を見ているかを見ることであるが、大きく二つの場合がある。視線が、見ている自分に向かっているのを見る場合と、そうではなく、他所よそに向かっている場合と。顔がどちらを向いているか、というのが視線の方向の大枠を決める。しかし、顔は前を向いてほとんど動かないのに、目だけがすばしこく動き、あちこちを見るということがよくあり、その(人の)目の動きを、目が見ようとしている方向を含めて、私たちは見る。顔全体の表情をも見るが、特に目をも見、目を見るときは大抵は視線を見ることなのである。綺麗な目だな、とか、そういう見方をするだけの場合もあるのだけれども。

(2)特に、視線が、見ている自分に向かっているかどうか、というのは、目を見ればすぐに分かる、というのは重要である。見ることは既に見ている相手と或る関係を取り結んでいることであり、更に、新たな関係をとっていこうとすることの前触れでもある。だから、自分が見ている人が見ている相手、これが自分であるなら、自分はその人に巻き込まれているのである。そこで、私たちは人の目を見て、自分が見られていることが分かる。見られているというふうに見るのである。そうして、このように見ることは猫だつてする。庭に(金魚が泳いでいる石臼が置かれている片隅に)そろりとしてやってきた猫が私の目を窺って、暫し立ち止まる。猫と人間である私とが目を合わせることをする。私が視線を逸らすと、猫は安心したように動き始める。

(3)次に、自分が見ている人がこちらを、自分を見ていると見るのではない場合。話していて、目がくるくるよく動く人だな、活発でお茶目そうな人だな、と思って見ている場合、目そのものを見ていて、視線を見る、というほどのことでもないと言える。けれども、何を見ているのだろうか、と、視線の先を自分も見てみるというとき、まずは、人の目を見るのが、その人がどの方向に目を向けているかを見ることだ、ということがあってのことだというのは言うまでもない。視線を見るとは、目の黒い部分が上下左右に動いているのを見るというだけではない。動物行動学の研究者たちの言うことなども考慮すると、人間だけが人の視線の先を見るような見方ができるのではないか。猫は、私なりもう一匹の猫なりの目を見て、目が合う場合には、自分が見られていると分かるが、相手の目が逸れると、それで、もう相手の視線に注意しない。自分から逸れた視線がどこに向かうか、その方向の先を見はしない。

(4)また、私たちが人の(自分に向けられたのではない)視線の先を見ることは、人の指を見て、その指の動きそのことだけを見るのではなく、場合によって指が或る方向を指しているとする、指が指す方向を自分も見ることとつながっているだろう。

### 3. 視線を逸らす・衣服

(1)ところで、電車の中で見知らぬ人と偶々目が合ってしまうと、どちらからともなく目を逸らす。別の方に目を遣るのである。見続けると、なぜこの人は私を見るのだろうか、という疑念をもたせてしまうという懼れ、ないし配慮からだろう。なぜ見るか、特に理由があったわけではなくとも、そのような問いが生まれるほどに、人を見るというのは、(特に目を見るのではない場合でさえ)人と或る関係に進んでゆきかねない傾きをもつ。

(2)既に知り合っていて、あるいは向き合いが始まっていた上での目は、問いかけとか同意、共感、興味をもっているなどの意味合いをもって動く。目に限らず顔の表情あるいは手、指、肩、体全体の身振りなどがさまざまに意味をもつ仕方で、人は向き合う、互いに人を見る。しかし、向き合う前の段階、向き合うかどうかが決まる前の段階がある。そのとき、人の目を見る、偶々目が合ったのではなく、見続けるといえるのは、向き合うことを強制するような力をもつ。だから場合によっては失礼なことになる。離れているのに、相手の領域に踏み込むことになるのである。

- (3) 混み合った電車で体と体とが触れ合わざるを得ないことはある。その状況を人は理解しているから許容する。しかし、そういう特殊な状況がないときに、人が握手であれ誰かの体(もちろん体の一部——触れるとは何に触れようとその一部に触れるのである——)に触れるのは、そこに特定の関係が生まれているからであり、また、生まれさせようと望むからである。ところが、視線は触れることなしに、離れたままで関係を生まれさせかねない。それで、このことに絡めて、筆者は、先に挙げた四つの重要なことのうちの一つ、人が衣服を纏うということを考えたい。
- (4) 衣服についての考察に論を進めるのは本書の範囲を越える。だから、基本的なことの指摘だけにする。衣服は三つの役割をもつ。一つは、体の防御や快適さの確保。防寒とか防塵(砂などから体を護る)とか、鎧にまで発展するような役割。それから、あと二つは人間関係に関わることで、体の一部を隠すこと、つまり、見られることを拒否すること、そうして逆に、衣服を通して積極的に見られること。後二者についてのみ若干のことを述べる。
- (5) 視線を逸らすとは、自分が相手を見ないという意思表示であり、同時に、自分が見られること(少なくとも、まともに見られること)の拒否である。そして、人と積極的関係をもつことの拒否である。目を交わすことはその反対である。しかし、私たちが人を見ないということは不可能である。地面を見、木立を見、食べ物を見るのと同じように人の体を見る。本章の一等最初に言ったように、体こそ見ることのできるものの筆頭なのである。そこで、見られたくなければ隠れる。しかし、何か活動するには隠れてばかりはいられない。
- (6) 衣服には体を部分的にのみ隠すという側面がある。では、どの部分を隠すのか。(保護すべき場所を覆うという衣服の役割とは別の理由を求めている。)体の特定部を見られることの拒否には、性というものが絡んでいるのに違いない。ただ、逆に、体を隠すはずの衣服が或る仕方で、衣服を纏った体が積極的に見られることの方を推進するということもあり、その理由の一つも性の事柄に通じているのかも知れない。そのことは、動物の求愛時の体の変化などから類推できる。人類の歴史で、成人、既婚、経産婦等を表すために、刺青、髪型、抜歯、化粧等、体の表面そのものを加工することが<sup>あまね</sup>遍くみられた、そのような体の扱いの延長に、衣服が、装身具ともども、あったのだらう。
- (7) それから、人間の社会の規模が大きくなり複雑化すると、また、他の集団との対峙という状況が頻繁になると、リーダーシップや支配、危機管理などの政治が生まれ、身分を示すための衣装が生まれる。そうして、今日のファッションにまで至る、服を通して他の人々から見られるということの重要な役割は増大することはあっても減じることはない。

#### 4. 声を聞く・言葉への移行

- (1) 顔の中で、口は食べる口であり、大きく息をするときの鼻腔の役割を補うものでもある。そして、ハアハア言う息もあれば溜め息もあって息は<sup>しばしば</sup>屢々音になるが、音は声ともなる。その声が、赤ん坊では泣き声から出発した声が、言葉の音となる。

(2)言葉となる音の出し方は学ばなければならない、学ぶためには自分が出す音を聞き得るのでなければならない。そして、その聞き得ることは、他の人が出す声を聞き得ることと一緒にである。(そもそも出し方を学ぶとは、自分が出す声と他の人の声との一致、自分が聞くことにおける一致を目指すことである。)そして、溜め息や泣き声なら、音が向かう特定の方向を言う必要はないが、言葉の音は或る方向に向かう。もちろん、音は四方八方に広がるのだけれども、聞かれることを求めて音を出す人は、木の枝で幹を叩いて音を出す場合なども含めて、音を聞くであろう相手に向かって音を出す。そして聞く人は、呼び声を始めとして、或る声は自分に向けて言われているのだということが分かる。——以上の事柄は、声が言葉となること、声を言葉として分かることとはもちろん別のことであるが、言葉が成立するための不可欠の条件である。

(3)ところで、人を見るとき、その人の現在がどのようなものであるかに焦点があるのだ、と本節の最初に述べた。視線、表情、衣服を見、声を聞くとき、そのような目の動きをさせ、そういう表情をもった人の現在の有りようが重要だと思うのである。けれども、その現在は直近の未来がどのようなものになるのか、そのことと関係をもつゆえに重要なのである。そうして、言葉だって、言葉を発する人のそのときの有りようを知らせる。とは言え、言葉の意味は言葉の使用のときを越えて働く。

(4)実のところ、その時々に対応しい衣服も、身に着けられている或る時間の間、或る意味を振りまき、或る秩序をつくり持続させようとする。その意味や秩序は確固たるものというより、ふわふわしたものであるかも知れないが。それが身分を示すような衣服になると、長期にわたって固定的な意味を発信し、或る秩序を維持する働きをする。

(5)一般的に考えても、知覚世界というものは価値的観点から理解すべきであり、知覚に含まれる認知等の認知的要素も価値文脈に従属するのであるが、時間という契機を考慮すると、価値の問題は意味の問題を抱え込むようになる。知覚の時間は現在という時間であり、しかしながら、価値に関わるとは、いま痛い、いま温かくて心地良い、いまうっとりしているということではあるが、ほとんどの場合に來たるべき時間をどのようなものにするかという対処の要求と連動する。そのことは見方を変えれば、現在の価値事象は次の時間の事柄をなにがしか指示するというものである。しかるに、このような指示は意味を呼び寄せる。

(6)次の時間は未だ、ない。ないものが経験内容に入ってくる。ないものがどのようにして、それなりの現実性を得るのか。ここに想像という働きと、想像内容の感受というものが姿を現わす。物象のような存在性格はもたないが或る働きをすることによって現実性をもつものに人間は関わる。そうして、想像は物象の世界から離れた何かを形成してゆくが、言葉の支えのもと、生まれては消えるたぐいものとは違った意味事象が相互にさまざまな関係を取り結ぶことで、意味世界とでも言い表したいものが幾つも生成する。

(7)私たちは、現代、人工物に取り囲まれて生活している。人工物はさまざまな意味を分泌する。道路標識のように明確に「何かを意味する」ことを任務とするものだけでなく、たとえば道路自

体が、ここを歩くべきで、道を逸れた場所に入ってゆくべきではないということを人に語る。そこには、単に泥濘ぬかるみよりは固い地面の方が歩きやすいから其処を大型動物も人も歩く、というのとは違った原理が既に入り込んでいる。車道、歩道が分かれていることはこのよう事情をはっきりとみせてくれる。更に一つ注意したいが、人の視線や表情、衣服は見ることができ、声を聞けばその声の主をその辺りにいるだろうと探すことができるが、道路建設を計画した人、道路を建設した人は、見え、歩く道路の所にいない。しかし、人が消えても、人が関わって生じたあれこれのものが、あれこれの意味を発信し、ときに人にあれこれを指示したり要求したりする。

(8) こうして、私たちは、「はしがきに代えて」で述べた重要な主題へと向かわされる。体の感覚と物象の知覚の考察は、生きている体にこそ源泉がある諸々の価値との関係で理解すべきであったが、他の人々とともに暮らす中で、意味世界と一体になった複雑な諸価値をどう感受し、それらにどう対応するかを決めてゆく、という状況の中に人間はいるのである。

P452 ~ 457

#### [コメント]

毎年、11月の第3木曜日は「ユネスコ世界哲学の日(UNESCO WORLD PHILOSOPHY DAY)」。ユネスコ本部のあるパリは、イスラム国によると思われる同時多発テロに襲われ恐怖のどん底にある。このようなときにこそ、ユネスコの原点である「心の中に平和のとりで砦を築こう」に立ち返り、行動を起こしたい。「価値」「意味」「秩序」という哲学の基本的な観点からものごとを考える東京大学文学部哲学科で教え続け、現在大正大学教授の松永澄夫先生の本著は、極めて参考になる。是非、御一読を。

— 2015年11月19日 林 明夫記 —